

世界文化遺産の登録候補に正式推薦へ

長崎の教会群とキリスト教関連遺産

4世紀にわたる信者の営み象徴

このたび天草の崎津集落を含む「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」が世界文化遺産（以下、世界遺産）の登録候補として、政府から正式に推薦されることとなった。天草のキリシタン史跡が世界遺産候補に選ばれたのは、



世界文化遺産の登録候補として正式に推薦されることになった「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の構成資産の崎津集落。天草市河浦町

それが日本へのキリスト教の伝播と繁栄、その後250年にわたる禁教下の潜伏、そして解禁後の復活と教会堂の建設という、世界に類を見ない劇的な歴史を伝える稀有な文化遺産であることによる。崎津は450年ほど前から「サ

県立大文学部准教授 平岡 隆二

シノツ(Saxinoccu)「港として西洋文献に記載され、とくに領主の天草氏が1571年に洗礼を受けて以後、日本布教の重要拠点として発展した。

その信仰は、江戸時代の禁教下においても脈々と継承された。1805年に起こったキリシタン検挙事件「天草崩れ」で一斉摘発を受けたが、当時の古文書からは仏教・神道と併存する独特の信仰形態をつかうことができる。さらに明治以降、教会への復活を果たした信徒らは、江戸時代に絵踏み(踏絵)が行われていた庄屋跡に崎津天主堂を建設し、現在に至るまで信仰の場として維持されている。崎津集落とその文化的景観は、以上のような4世紀にわたる日本のキリスト教信者の

営みを象徴する存在であり、世界遺産としての価値を証明する上でも不可欠の構成資産なのである。

また今回の構成資産の範囲から外れはしたものの、崎津に隣接する河内浦(現河浦町)に設置されたコレジオ(神学校)において、日本と西洋との初めての出会いを象徴する貴重な文化遺産が多数生み出されたことも見逃せない。コレジオは、次世代の日本教会を支える日本人神父を養成するための高等教育機関で、たとえばヨーロッパの科学や哲学を本格的に日本に紹介した最初の書物であるペドロ・ゴメス著「講義要綱」は、1593年に天草コレジオで脱稿され、初めて講義された。

内容や背景が異なるため単純な比較はできないが、明治政府による西洋学術の全面的導入よりおよそ300年前、江戸時代の「蘭学」にも200年先立つこの時期に、西洋学術の本格的な講義が行われたことは特筆に値する。

またコレジオにはグリーンベルク印刷機も導入され、西洋人による初の本格的な日本語辞書「羅葡日対訳辞書」や日

本語文法書「フテン文典」(ともに1595年刊)、またイソップ物語や平家物語などが相次いで出版された。いずれも天草が当時の東西交流の最重要拠点であったことを裏付けるもので、ローカルな歴史の理解のためだけでなく、今日まで続くグローバルな交流の始まりを告げる歴史遺産としても、比類ない価値を有している。

以上のように世界的な価値と意義を有する天草のキリシタン史跡が、今回世界遺産候補となったことはまことに慶事である。しかし忘れてはならないのは、崎津天主堂をはじめとする教会群が、貴重な歴史遺産であると同時に、現代を生きる信徒の方々にとっての祈りの場でもあることである。

実際、その性格を十分理解していない来訪者が、無断で祭壇(内陣)に立ち入ったり、鐘を鳴らしたりするなどのトラブルが後を絶たない。またむやみに携帯電話・カメラを使用することや、敷地内での飲食・喫煙などのマナー違反にも気を付けたい。今回の推薦を契機に、その価値と性格についての知識が多くの人々に共有され、より望ましい形で保存・継承してゆくための整備が進むことを期待したい。

◇ひらおか・りゅうじ 1974年、大阪市出身。九州大学院単位取得退学。長崎歴史文化博物館主任研究員などを経て、2012年より現職。専門は東西思想交流史、科学史。主な著書に『南蛮系宇宙論の原典的研究』など。